

場所 京都府京都市

面積 1.65ha

活動目的 都市における京都本来の自然環境の再現・保全に貢献し、国内外から訪れる来園者に、自然や日本庭園文化に親しみ、学ぶ機会を提供する。「朱雀の庭」は京都の生物文化多様性の庭園文化拠点となり、「いのちの森」は生物多様性保全の森づくりに向けた中長期計画の達成に貢献する。

サイト概要

梅小路公園は、都市化された市街地の中心における大規模な緑の拠点として整備された都市公園である。園内には、池泉回遊式庭園である「朱雀の庭」と、復元型ビオトープである「いのちの森」が一体となった有料区域として整備されている。「朱雀の庭」は、京都の庭園文化を継承し、地域の生き物を育む、いわば生物文化多様性(国連大学サステイナビリティ研究所)の新たな拠点として機能している。「いのちの森」は継続的な動植物調査や自然観察会を行っており、植物618種、鳥類80種、菌類380種が確認されている。年間約2万人の来場者が訪れる公園内の有料エリアとして、市街地において自然と親しめる貴重な場となっている。



土地利用の 変遷

梅小路公園がある場所は、元は国鉄清算事業団所有の梅小路貨物駅跡地であった。公園の整備は1992年に始まり、「都心の緑の創造」、「歴史の継承と未来への飛躍」をテーマとしたシンボリックな施設として、1995年に「朱雀の庭」が、1996年に「いのちの森」がそれぞれ整備された。その後、公園内に民間資本による水族館、鉄道博物館が建設され、隣接地にはJR嵯峨野線の新駅が建設されるとともに、近年は100室規模のホテルが4件開業するなど公園を中心に着実な町づくりが進んでいる。

サイト周辺の 環境

梅小路公園は七条通りの南の準工業地域にあり、周りは概ね近隣商業地域に指定されている。南側はJR線路に接し、東はJR高架線、駅舎、駐車場等となっている。旧来の住宅、七条通商店街、小学校の他、近年は公園に隣接して、100室規模のホテルが4軒開業した。

アピール ポイント

「朱雀の庭」は、庭園景観と京都における和の花の系統保全に活用されている。「いのちの森」は、元々自然環境がなかった梅小路貨物駅跡地において、起伏に富む地形や多様な水辺環境を再現し、人為的な干渉を抑えた「ほどほど管理」を導入することで、植物や生き物の自然な再生を試みており、整備以降約30年に渡りビオトープにおける自然再生の過程をモニタリングしている貴重なサイトとなっている。

生物多様性の価値

価値（3）里地里山といった二次的な自然環境に特徴的な生態系が存する場

【場の概況】

「朱雀の庭」には水辺や野筋と呼ぶシバ草原が存在する他、京都の代表的な二次的自然であるアカマツ林と溪流のイロハモミジ林の景観を意識した構成となっており、「いのちの森」は都市化以前の京都盆地、山城原野を念頭に計画、整備され、約30年を経過し、二次的な自然環境の成熟が進んでいる。京都府自然環境目録の植物25%（618種/2,420種）、鳥類22%（80種/358種）、菌類（地衣類を除く）28%（380種/1,349種）を確認。

【主な植生】

「いのちの森」は、エノキ・ムクノキ林、里山構成種のコナラ・クヌギ林、アカマツ林、アラカシ林等の様相を呈している。「朱雀の庭」は主にアカマツが高木層の優占種であり、低木層にはヤマツツジなどが見られ、シバ草原に野筋がある。

【確認された主な動植物など】

【植物】：繁茂したシュロ類、ササ類、フジ（*Wisteria floribunda*）等の過繁茂状態については除伐管理を行い、アオキ（*Aucuba japonica*）、ヒサカキ（*Eurya japonica*）はじめ多数の、里地里山二次林構成植物種が確認されている。ブナ科やマツ科の樹木は共生者としての菌根性きのこが必須であるが、モニタリングによって菌根性きのこの共生が十分であることが判明している。

【鳥類】：アトリ（冬鳥）やセキレイ類、ムクドリは朱雀の庭で確認されている。カワセミは「いのちの森」でこれまで記録されている。これまでのモニタリングで、京都府の絶滅寸前種（1種）、絶滅危惧種（7種）、準絶滅危惧種（9種）が確認されている。

【菌類】：樹林の成長に伴い子囊菌類で冬虫夏草の一種であるオオセミタケ

（*Paraisaria heteropoda*）が発生している。これは昆虫であるセミの個体数調節に重要な役割を果たしている。毎年5月のグリーンフェア開催時には、地下にあるセミの幼虫とのつながりを観察するため、掘り取りイベントを行い、菌類の役割に関する教育と普及に役立っている。寄生されているセミはアブラゼミであることが多い。



写真の説明：いのちの森のムクノキ



写真の説明：オオセミタケ（掘り取り後の様子）

生物多様性の価値

価値（４）生態系サービスの提供の場であって、在来種を中心とした多様な動植物種からなる健全な生態系が存する場

【場の概況】

申請区域は、健全な生態系サービスを維持するための、植物（生産者）、動物（消費者）、菌類等（分解者）が機能する食物連鎖系が概ね成立している。「朱雀の庭」の日本庭園は蘚苔類に配慮した庭園景観管理が不可欠である。「いのちの森」は、山城原野を目標とし、大半を自然遷移に委ねる粗放的管理が行われ、内包する水田で子どもに田植え体験を提供している。またシマヘビやアオダイショウが確認されている。

【主な植生】

「いのちの森」は、エノキ・ムクノキ林、里山構成種のコナラ・クヌギ林、アカマツ林、アラカシ林等の様相を呈している。園内を流れる水系と中央部分には水田、畦畔環境（半自然草地）がある。「朱雀の庭」は主にアカマツが高木層の優占種であり、低木層にはヤマツツジなどが見られ、野の風景が広がる野筋はシバ草原となっている。

【確認された主な動植物など】

【植物】：生態系サービスとしてかつては一般的に食用として利用されていたものを含めると、カキノキ、ヤマノイモ、ニラ、イネ、アケビ、ムベ、ヤマブドウ（京都府要注目種）、サンザシ、ビワ、クリ、ヤマモモ、ワサビ等が確認されおり、来園者に情報提供を行っている。

また文化的サービスとしては、京都の三大祭りのひとつである葵祭での飾りつけに使われるフタバアオイ、祇園祭で各家々に飾られるヒオウギ、秋の七草のひとつであり平安貴族がその香りを楽しんだフジバカマなど、日本の伝統文化の継続を支え、その素材となってきた植物が、いのちの森では確認されている。

【動物】：高次捕食者としては、主に秋から春にかけてモズ（鳥類）が生息するほか、アオサギ、コサギ、カワセミなどの魚食性鳥類が頻繁に飛来する。かつてはシマヘビ、近年はアオダイショウ（ヘビ）が園内で観察されている。

【菌類】：シメジ類、イグチ類、キクラゲ類など、かつては一般的に二次林で採られて食べられていたきのこのに関する情報を来園者に提供している。



写真の説明：子ども達による田植え体験

生物多様性の価値

価値（5）伝統工芸や伝統行事といった地域の伝統文化のために活用されている自然資源の供給の場

【場の概況】

申請区域の「朱雀の庭」は、かつて京都周辺の山々でよく見られたアカマツ－コバノミツバツツジ群落が形成されるなど、京都の風土を形成する三山の景観が造成時から創出され、庭師の細やかな手入れにより、その環境が保全されている。近年の京都周辺の山々の環境変化（常緑樹林化・シカ害等）により自生する植物が数を減らす中で、「朱雀の庭」は、景観のみならず、京都由来の植物に適した日照・湿度・植生等の環境条件が維持された場となっている。

【伝統文化等の名称】

「春の和の花展」（4月下旬～5月上旬）・「藤袴と和の花展」（9月下旬～10月上旬）
「和の花」とは、古くから自生または江戸時代までに渡来し、長年にわたり日本の風土の中で育ってきた植物や、主として江戸時代から観賞のため選抜、育種されてきた伝統園芸植物である。朱雀の庭において、春、秋の期間に、京都の自生植物を展示する「和の花展」を、2009年から開催している。「和の花展」では、鉢植えで育成した希少種を含む「和の花」を、それぞれの生育環境に適した場所に展示することで、文芸、祭礼、生活利用など京都の文化に関連する植物や、伝統園芸植物の基原となった植物が絶滅に瀕している現状を市民が知る機会にもなっている。

【活用している自然資源】

「藤袴と和の花展」では、フジバカマやオミナエシなど庭園内に約80種、約300鉢の和の花を展示している。京都市内で1998年に見つかったフジバカマの自生種(京都府の絶滅寸前種)の系統保全のため挿し芽更新で育成した株を、庭園の浅池「水鏡」に約100鉢(500株)並べ、同種の本来の野生の生息域である水辺の風景をイメージした展示を行っている。フジバカマは栽培型（*Eupatorium fortunei*）と混同されがちであるが、大原野で発見された系統は、原色日本植物図鑑の共著者である村田源氏により 野生種（*E. japonicum*）と同定されたもので、学術研究によりその価値が把握されている。展示後のフジバカマの一部は、市内で同種の保全に取り組む団体に譲渡するなど、京都の伝統園芸の拠点として、和の花の系統保全に貢献している。



写真の説明：朱雀の庭



写真の説明：春の和の花展・藤袴と和の花展

生物多様性の価値

価値（6）希少な動植物種が生息生育している場あるいは生息生育している可能性が高い場

【場の概況】

申請区域内の「いのちの森」は、エノキ・ムクノキ林、里山のコナラ・クヌギ林、アカマツ林、アラカシ林など二次林の様相を呈している。園内を流れる水系と中央部分には水田、畦畔環境（半自然草地）がある。「朱雀の庭」は主にアカマツが高木層の優占種であり、低木層にはヤマツツジなどが見られ、シバ草原の野筋にはヒガンバナも点在する。大滝からの溪流景観を構成する石組みは、蘚苔類、地衣類の恰好の生育場所となっている。

【確認された希少種】

- 【植物】：14種について「いのちの森」内で定着が確認されている。
- 【動物】：両生類1種、魚類1種が確認されている。
- 【菌類】：1種が確認されている。
- 【蘚苔類】：1種が確認されている。
- 【地衣類】：1種が確認されている。

生物多様性の価値

価値（8）越冬、休息、繁殖、採餌、移動（渡り）など、動物の生活史にとって重要な場

【場の概況】

申請区域は、都市公園内に創られた「朱雀の庭」と復元型ビオトープ「いのちの森」となっている。「朱雀の庭」では伝統的な園芸技術で育てられてきたフジバカマ等の和の花を栽培保全、展示啓発を行う中で、アサギマダラの飛来を確認している。「いのちの森」では、アカマツ群落が成立する崖部分、水田、池泉は、野鳥が繁殖・採餌する場となっている。

【対象となる動物種とその動物種の生活史の内容】

長距離の渡りをする事で知られるアサギマダラが夏から秋にかけて旅をする中で蜜を吸うのがフジバカマの花である。「朱雀の庭」では、1998年に京都市西京区大原野で発見された希少な野生種を中心に系統保存を行っている。その季節になると多くの飛来を確認している。



写真の説明：アサギマダラの飛来

サイトの活動計画・モニタリング計画

活動計画の内容	モニタリング計画の内容
<活動内容> 1.維持管理・保全 ・朱雀の庭：基本管理（巡視、除草清掃）に加え、植物管理（剪定、施肥、灌水、補植、害虫駆除等）を実施し、庭園の景観にふさわしい姿を維持する。 ・いのちの森：多様な生き物が生息しやすい環境づくりのため、除草（年3回）、池及び流れ清掃（年3回）、園地清掃（年12回）を実施する。 2.教育・普及啓発 ・朱雀の庭：庭園の魅力を伝えるガイド（月1回）および和の花展（年2回） ・いのちの森：体験型講習会（月1回）、クイズラリー（年1回）、自然観察会（年2回） 3.モニタリング ・基礎的な生物関連データの取得、評価等を行う。 <実施体制> 京都市は、指定管理業務として（公財）京都市都市緑化協会に活動を委託する。同協会は、モニタリンググループと協働し、モニタリング活動を実施する。 <計画の点検・見直し> （公財）京都市都市緑化協会は、年度ごとに事業計画書を作成し、京都市はその内容について確認し、承認する。	【モニタリング対象】 申請区域の、植栽導入及び侵入した植物と、そこに成立する動物（生態系の頂点である鳥類が主となる）、菌類を対象とする。また、多様なモニタリング体制の中で、可能な範囲で爬虫類、昆虫等も確認する。他の分類群及び環境要素についても機会を検討する。 【モニタリング場所】 申請区域全域とする。 【モニタリング手法】 植物班、鳥類班、菌類班はルートセンサス調査とする。その他はその時点での最善の調査方法に拠る。 【モニタリングの実施時期及び頻度】 植物班、鳥類班、菌類班は、毎月、年12回実施を原則とする。その他はその時点での最善の調査回数とする。 【モニタリング実施体制】 京都ビオトープ研究会 いのちの森モニタリンググループ会員が実施する。 「⑤いのちの森中長期構想」の推進に向けて、毎年、実施体制を含む活動のありかたを検討しつつ進める。